

図書館だより

目次

再読という読書体験	——白杵 陽	1
著作紹介 篠原聡子【ほか】編『「住む」ための事典』	——篠原 聡子	2
著作紹介 北村暁夫・田中ひかる編『近代ヨーロッパ と人の移動—植民地・労働・家族・強制』	——北村 暁夫	3
アーツ・アンド・クラフツ展とケルムスコット・プレ ス版『ゴシック建築』	——川端 康雄	4
まずはアクセス！新図書館ホームページ紹介	——中澤 恵子	6
EZproxyによる学外からのデータベース等の利用につ いて	——矢吹 さより	6
「JWUラーニング・コモンズさくら」で学ぶ	——村井 あかり	7
図書館からのお知らせ	——濱口 都紀	8



図書館玄関ホール展示

再読という読書体験

白杵 陽

2021（令和3）年4月から人間社会学部が目白台に移ってきてキャンパスが統合され、百二十年館も竣工しました。目白通りを隔てた図書館も皆さんはすでにご利用されていることでしょう。

さて、今回は再読という読書体験について考えてみたいと思います。取り上げる本は、P・ラビノー著、井上順孝訳『異文化の理解—モロッコのフィールドワークから』（岩波現代選書、1980年）です。40年近く前に出版されてすでに絶版ですが、本学図書館には所蔵されています。大学時代の恩師が書評を書くということで私自身も手にとった本でした。それまでのフィールドワークに基づく人類学的な分析とはまったく違ったスタイルで書かれていたので驚きました。最近、大学院ゼミで使用したテキストに著者ラビノーの名前が出てきたので原著と一緒に購入して再読してみました。

イギリス風に「社会人類学」と呼ぶかどうかはここでは問わないとして、学生時代、文化人類学のゼミに参加した時、朝日新聞の本多勝一氏の著作が議論の中で話題になりました。本多氏は取材に基づいて人類学的手法を批判する三部作を出版しました。『アラビア遊牧民』、『ニューギニア高地人』、そして『カナダ・エスキモー』（合本して『極限の民族』1967年、朝日新聞社）です。

つい先日逝去されたポール・ラビノー・カルフォルニア大学バークレー校教授（1944～2021年）は人類学の泰斗マリノフスキーのように観察者が表に出てこない伝統的な記述方法を批判しつつ、調査地に身を置く人類学者自身も含めて描くという斬新なスタイルを主張しました。『異文化の理解』の訳者が神道研究で著名な、若かりし頃の井上順孝・國學院大學教授だったことも意外でした。

ところで、温故知新という熟語があります。ご存じのように、読み下すと「故きを温ね新しきを知る」となり、「以て師と為る可し」と続きます。『広辞苑第六版』には「(古い事柄も新しい物事もよく知っていて初めて人の師となるにふさわしい意)昔の物事を研究し吟味して、そこから新しい知識や見解を得ること」と説明されています。かつて読んだ本を40年ぶりに読み返してみても、この温故知新を思い出したのです。読書の愉しみは再読によって新たな追体験ができることです。

その後、私自身はモロッコを何度も訪れましたが、今考えるとラビノーの著作の読書体験が私自身のモロッコ・イメージを決めたと感じています。新型コロナウイルス禍の波が再来する今、今夏開催予定だったモロッコでの国際会議が延期されたのは残念です。それはともかくとして、再読という読書体験が皆さんにとっても新たな想像力を生み出す原動力となるだろうと確信しています。

(図書館長・史学科教授)

著作紹介

篠原聡子【ほか】編 『「住む」ための事典』

篠原 聡子

「住む」ための事典は、「だれと住むか」「どこに住むか」「どう住むか」という問いから始まっている。だれと、どこに、どう住むか、などというのは、かつて自明のことであって、問いがたてられるようなものではなかった。

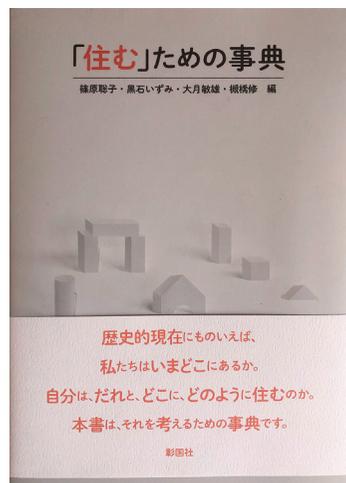
世界遺産にもなった白川郷の合掌造りの住まいの多くは江戸時代に建てられたものであるが、そこに生まれた人々の生涯は、ほとんどその家の中にあつた。男性も女性も、結婚して所帯を持つということは、長男家族の特権であり、田分け(分家)をせず、家族がある規模(江戸時代には大きな家では、30人に近い人々がそこに暮らしていたが、養蚕が盛んになった明治にはさらに多くの住人が一つ屋根の下に暮らしていた)を保っていることが、雪国という生産性の低いその場所にあつては必須であつたからである。住まいは、その場所の風土に密着して、そこで生きていくための形を持ち、そこで生きていくための集団を内包していた。

近代社会になり、賃金労働が一般的になると、家族の機能から生産が消えて、その器である住まいは再生産の場となった。場所との関係も必然性を持たなくなり、職業とは別に住まいは選ばれるようになった。別の言い方をすれば、私たちは、住まいを選択できる自由を手に入れた。どこに、誰と、どのように住むかを選べる自由は、近代社会で私たちが手に入れた最大のものであつたかもしれない。

近年、住まいの種類がどんどん増えている。しかし、それは果たして、選択の自由が増えたということなのだろうか。住宅双六というのは、戦後の日本における住み替えのパターンを図解したもので、中でも当時京都大学の教授であつた上田篤氏によるものが嚆矢のものとして記憶に残っている。それはアパートからマンション、上りが郊外戸建てというまさに高度経済成長を生きるストーリーでもあつた。しかし、上りのはずだつた郊外の戸建ては継がれることもなく空き家が増え、そこに人生の上りがあるともすでに確信はできない。弱くなった家族の紐帯、長くなった人生の中で、私たちは、だれと、どこに、どう住むかについての問いと向き合わなくてはならない。

一方で、そうした問いに対して自ら選択肢をつくる、という選択もあるだろう。実際に、現在増えてきた多くの住まいの形や住まい方には住人自身による内発的なものも少なくない。そうした試みを探りながら、これからの「住む」ことを多面的に捉え、「住む」ことに対する当事者意識をエンカレッジするための事例や視点を取り上げた事典である。現在、だれと、どこに、どう住むか、それはまさにどう生きるか、と同義なのである。本著は、その問いに向き合う人々にささやかながらヒントを提供しようと編集されたものである。

(学長・住居学科教授)



著作紹介

北村暁夫・田中ひかる編『近代ヨーロッパと人の移動—植民地・労働・家族・強制』

北村 暁夫

新型コロナウイルス COVID-19 感染症の世界的流行は、さまざまな現象や問題を引き起こし、さまざまな課題を私たちに突きつけている。人の移動をめぐる諸問題はその最たるものであろう。ワクチンや治療薬など効果的な対策が整わない段階では、人の移動（「人流（じんりゅう）」）という言葉がこの感染症流行の前に聞いたことがあったらどうか？）を抑制することが唯一の対策であるとして、まずは国境を越える移動が厳しく制限され、ついで国内の移動の制限、さらに国によっては自宅から外に出て町を歩くことさえ制限される事態に至ったのである。移動の自由は近代社会において獲得された基本的な権利であり、資本主義の発展の推進力としても推奨されてきたことであるはずなのに、それがいとも易々と反故にされることになった。この間に生じた状況を見れば、人の移動が社会にとっていかに重要な営為であるかがよく理解できる。

本書は、世界史的に見ても人の移動がとりわけ活発となったとされる近代ヨーロッパを対象として、実際に移動を実践した人々に焦点をあてて、なぜ彼らが移動することになったのか、その「移動の論理」を明らかにすることを目指した、8人の執筆者による共同論集である。

本書の最大の特徴は、同じ国のなかの移動（農村から都市への移動など）、ヨーロッパ内部での国境を越える移動、ヨーロッパから南北アメリカ・オセアニアへの移動を区別することなく、そうした一連の移動のなかに見られる移動の論理を明らかにしようとした点である。たとえば、19世紀のヨーロッパではアメリカ合衆国を中心とした南北アメリカ・オセアニアへの移民が劇的に増大し、「移民の世紀」とも呼ばれて大きな関心を集めてきた。これに対して、本書は、そうした大西洋移民とも呼ばれる人々にも着目する一方で、国内移動やヨーロッパ内部での移動（移民）をも含めて考察することによって、近代ヨーロッパにおける移動をより体系的に理解しようとしている。

この方針で編まれた本書には、たとえば、19世紀末から20世紀初頭にロシア帝国の内部で政府の移住奨励政策を背景にウラル山脈以東のアジアロシアへの移住を行った農家家族は、政府の意図とは裏腹に、彼らの故郷（移動前の居住地）と気候風土の比較的近い地域へ移住することを好んだとか、19世紀末にベルギーから北フランスの炭鉱地帯に移住して炭鉱夫となった人々は、彼らの出身地と移住先の北フランスが言語的にも文化・習俗的にもきわめて似通っていた（北仏と南仏との間の差異よりもはるかに小さい）にもかかわらず、国籍の違いによって差別の対象とされたといった、興味深い事実が描かれている。このほかにも、18世紀前半にオランダから南アフリカのケープ植民地に移住した人々、19世紀末から20世紀初頭にかけてハンガリー王国やクロアチアからアメリカ合衆国に移民した人々、同じ時期に北イタリアの内部で稲作地帯への出稼ぎ労働をした女性たち、移民という行為が広く行われていた地域で大地震が起きた際に先に移民をしていた人々を頼って移住した被災者たち、政治的な理由でロシア帝国からアメリカ合衆国への移住を決意した人々など、興味深い人々の姿が描き出されている。

本書は、2010年からこれまで10年あまりにわたって私が代表を務めているプロジェクトの成果の第一弾である。このプロジェクトは近代ヨーロッパにおける人の移動を研究してきた第一線の専門家を集結させたものと自負している。女性研究者が多く集まっていることも特徴の一つである。現在、成果の第二弾として、移動した女性たちと移動によるジェンダー規範の変容というテーマで新たな論集を準備しようとしているところである。それもまた期待していただきたい。

(史学科教授)



アーツ・アンド・クラフツ展とケルムスコット・プレス版『ゴシック建築』

川端 康雄

ウィリアム・モリス（1834-96）の装飾芸術の実践を主たる影響源として1880年代に興隆したイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動は、欧米諸国に波及したのみならず、日本での柳宗悦（1889-1961）らの民藝運動にも刺激を与えるなど、20世紀の国際的なデザイン運動の原点としての意義をもつと評価される。A・H・マクマードウ（1851-1942）のセンチュリー・ギルド（1882年創設）、アート・ワーカーズ・ギルド（1884年創設）などの活動を受けて、1887年にアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会が設立され、その第1回の展覧会が1888年秋に開かれた。同年にはC・R・アシュビー（1863-1942）によってギルド・オヴ・ハンディクラフトも立ち上げられている。

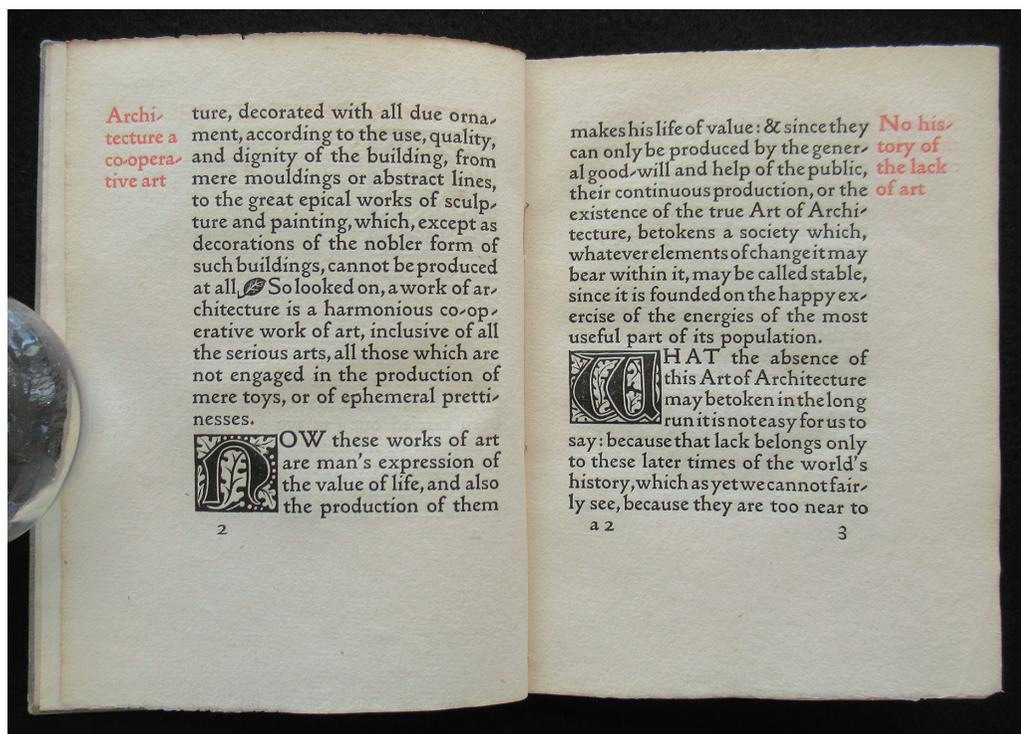
モリスがアーツ・アンド・クラフツ運動の影響源であると言った。じっさい、この運動の主体となったのはウォルター・クレイン（1845-1915）ほかモリスを師と仰ぐ一世代下のデザイナーたちであった。1850年代のモリスとジョン・ラスキン（1819-1900）やラファエル前派の画家たちとの関わり、1857年のオクスフォード・ユニオンでの壁画制作、1858年のレッド・ハウス建設とその後数年にわたる室内装飾、そして1861年に設立したモリス・マーシャル・フォークナー商会（1875年に改組してモリス商会）の実践は、後進の者たちにはデザイン史の伝説的な事績となっていた。1880年代のモリスはといえば、政治運動を活発化させ、1884年には自身が社会主義者であることを宣言している。若手デザイナーたちにアーツ・アンド・クラフツ展への協力を最初に求められた際には、政治の変革をまず進める必要があると述べて、どちらかという消極的な態度を取っていた。いざ始まってみれば協力を惜しまなかったのではあるが。

とはいえ、モリスが若いデザイナーたちを刺激したという一方的な影響関係ではなく、モリス自身がこの運動からインスピレーションを得るという逆の回路もあったということも指摘しておかねばならない。とくにそれは（モリス自身の表現で言えば）「活字の冒険」（typographical adventure）の実践に関わる。

1888年秋の第1回アーツ・アンド・クラフツ展の期間中、会場（ロンドン、リージェント街のニュー・ギャラリー）でさまざまな工芸をめぐる連続講演会が催された。その1回（11月1日）はモリスが講師をつとめ、「タペストリー織りと絨毯織り」の題目で、織機を導入しての実技入りの講演をおこなっている（それを描いた友人バーン＝ジョーンズによる戯画が残されている）。そしてここで重要なのが、写真技師のエマリー・ウォーカー（1851-1933）が1888年11月15日におこなった「活版印刷と挿絵」（Letterpress Printing and Illustrations）についての講演だった。ウォーカーは幻灯機を用いて活字の書体を拡大映写するなどして、初期印刷本の活字デザインと挿絵による版面構成が近代のものに比して卓越していたことを主張した。モリスは幻灯機によってスクリーンに映し出されたヴェネツィアのジャンソンらの活字体の印字に深い感銘を受け、自分自身で活字デザインをする可能性にこのとき目覚めたとされる。美しい印刷本を制作することは、すでに1860年代の『地上の楽園』の特装本の計画以来、何度か試みていたものの、当時入手可能な活字で満足できるものがなかったために実現できずにいた。ウォーカーの発表と実物提示は、装飾芸術における未完のプロジェクトのなかで長年の懸案だった活字本の制作にむけてモリスの背中を押すことになった。その講演の帰り道にモリスは活字デザインを手がけたい旨をウォーカーに伝えて協力を仰いだ。ウォーカーは二つ返事で承諾した。そういう次第で、アーツ・アンド・クラフツ運動は、1891年のモリスのケルムスコット・プレス（以下、KPとも略記）設立に刺激を与えることになったのである。

翌1889年秋に開かれた第2回展覧会でもモリスは「ゴシック建築」と題する講演をおこなった。1890年に第3回展覧会が開かれたが、初回に比べて展示品に質の低下が見られ、評判は芳しくなかった。財政難もあり、毎年の開催はそこまでとなる。1891年にモリスは初代会長のクレインの後任として第2代の会長に就任、第4回の展覧会開催は1893年のことだった。その会期（10～11月）にモ

リスはKP刊本の印刷作業の実演を展覧会場で参観者に見せることにした。そのときに印刷した本が第2回でおこなった講演をもとにした『ゴシック建築』（KPの18冊目の刊本）である。



ウィリアム・モリス『ゴシック建築』（ケルムスコット・プレス、1893年）（所蔵：日本女子大学図書館）

KP刊本63点のうちで、これが外部で印刷された唯一の書目であった。ハマスミスの工房から手引き印刷機（アルピオン）の一台がニュー・ギャラリーの会場に運び込まれた。ただし組版は工房で済ませていたので、見学者には刷りの工程のみを見せるというかたちであった。

KP刊本といえば以前に取り上げた『ジェフリー・チャーサー作品集』（1896年）の判型が2折判（folio）の大型本（1ページのサイズが425×292mm）で、これがもっとも名高いためにKP本のサイズが一律に大型であるような印象をもたれがちであるが、それは誤解で、63点の書物は最大の2折判から最小の16折判まで、7種類のサイズがある。この『ゴシック建築』がKPで印刷した16折判の最初の刊本であった。1ページのサイズは143×104mmである。全74ページ、活字はゴールドデン・タイプを使い、本文冒頭のタイトルと肩注を赤で刷った二色刷、クォーター・ホランド装、展覧会の会期中に紙刷本が3刷、総計1500部が刷られ、会場で2シリング6ペンスの価格で売られた。これはKP刊本のなかで最多の印刷部数である。他にヴェラム刷りの特製本が45部刷られた。

公開印刷の様子をモリスの秘書であったハリデイ・スパーリング（1860-1924）は「入れ替わり立ち替わり訪れる衆人の好奇の目にさらされて、ケルト人らしく内気な印刷工のコリンズは非常に緊張を強いられた」と回想している。KPの印刷工たちはハマスミスの工房でも、KPの評判を聞いて頻繁に見学を訪れる愛書家や記者らに作業を注視されて、かなりやりにくい思いをしたようだ。

16折判というこのKP刊本の最小のサイズは、その後数年にわたって、モリスの愛読する数篇の物語を印刷するのに用いられることになる。これについては稿を改めなければならない。

（英文学科教授）

まずはアクセス！新図書館ホームページ紹介

2021年4月、本学4学部・大学院5研究科が目白キャンパスに統合され、大学図書館はひとつになった。それに伴い、図書館ホームページも新しくなった。

最初に目を引くのはトップタイトル「日本女子大学図書館」を囲む写真かと思う。左側は旧図書館から現図書館へ引き継いだ「VERITAS VIA VITAE」の標語、右側は「JWUラーニング・コモンズさくら」へと変わった。開館カレンダーもひとつになった。また、お知らせと開館カレンダーの左右両側に並ぶ各項目はカテゴリー名のみ、詳細はリンクで示す形式となり、全体としてシンプルな印象になったと思われる。

まずは各項目をクリックして図書館から発信する情報を得ていただきたい。例えば、開館カレンダー「詳細情報」をクリックすると開館時間や西生田保存書庫取り寄せ便到着日など確認できる。旧西生田図書館を保存書庫として活用することも「キャンパス統合に関する図書館からのお知らせ」で告知済、資料の取り寄せは既に関連に行われている。Let's Access!お待ちしております。

(館員・ホームページ班 中澤恵子)



新図書館ホームページトップ

EZproxy による学外からのデータベース等の利用について

本学で契約しているデータベース等は、EZproxyにより学外から利用できるものです。

図書館のホームページに「データベース」>「オンライン・データベース」として、本学で利用できるデータベース等は一覧リスト化してあります。データベース名右側の欄の表記は、下記を意味しています。

目：目白キャンパスの学内ネットワークに接続したPCで利用できます。

Free：一般公開されていますので、どこからでも利用できます。

EZ：学外から利用できます。(EZproxy サービス)

このリスト中の「EZ」と表記されているタイトルが、学外からの利用ができるものです。データベース名を直接クリックしても学外からの利用はできませんので、ご注意ください。一覧の最上部、「学外アクセス (EZproxy)」のボタンから進むと、利用説明の画面が表示されます。こちらをよく読んでお使いください。

図書館では、コロナ禍の昨年4月から、EZproxyにより学外から利用できるデータベース、資料を順次増やしました。聞蔵Ⅱ(朝日新聞)、ヨミダス歴史館(読売新聞)、日経テレコンⅡ(日本経済新聞等)の新聞データベース、JDreamⅢ(科学技術・医学薬学関連文献情報)、Maruzen eBook Library(学術系電子ブック)等が新たに学外から利用可能になった他、JapanKnowledge Lib(百科事典・辞書等)はこの4月からアクセス数が無制限になりました。Maruzen eBook Libraryの資料も提供冊数を増やしています。貸出できない参考図書にも、Maruzen eBook LibraryやJapanKnowledgeLibで自宅からでも利用できるものもあります。どうぞご活用ください。

(館員・参考係 矢吹さより)

「JWU ラーニング・コモンズさくら」で学ぶ

村井 あかり

図書館の入退館ゲートをまっすぐ進んだところに、JWU ラーニング・コモンズさくらはある。JWU ラーニング・コモンズさくらでは、可動式机・イスやホワイトボード、貸出機器類を備えており、それらを自由に使って様々な学修活動を行うことが可能である。また、ラーニング・サポーターに、授業やレポートなどに関する学修相談をすることもできる。

ラーニング・サポーターとして活動させていただくように

なってから、もうすぐ4年になる。振り返ってみると、レポートの書き方・添削や研究の進め方、大学院進学、履修に関する相談など、これまで色々な相談があった。学修相談と言っても、サポーターは、学生が求める答えや情報を必ずしも持っているわけではない。インターネットで検索する方が早いことや先生に聞いた方が正確、ということが当然ある。それでも、サポーターのもとへ相談に来てくれたのだから、ただの情報以外に、何か「プラスα」のものを持ち帰ってもらいたいと思っている。

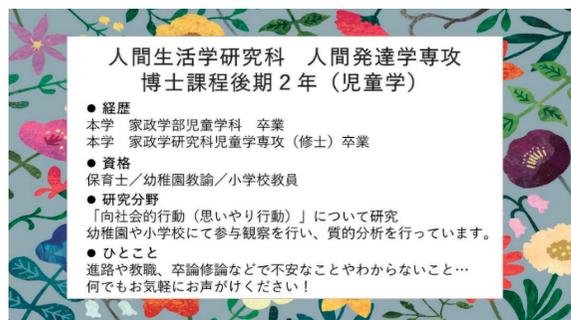


先日、学部1年生より、学修相談を受けた。就職

JWU ラーニング・コモンズさくら学修相談席にて

活動に向けての準備に関する質問で、今のうちに取得しておくべき資格や勉強方法を知りたいとのことだった。自分の経験や知人の体験談をもとに質問に答え、最終的に大学4年間をどう過ごすかという話になった。その時に「大学って就職活動のためにあるのか?」という疑問がふと浮かんだ。「就職活動のために～」としゃべりながら、ずっと覚えていた違和感の正体はこれだった。そこで、お節介かもと思いつつ、就活を目標にしながらも自分の「引き出し」を増やすことも頑張ってみては、と伝えた。人生という大きな視点でみたとき、職業・就職先は大きな割合を占めており、大学

の4年間は一瞬でただの通過点のように思える。だが、その一瞬こそ、何らかの「利益があるから」ではなく、ちょっと興味をもったことに手を伸ばして本を読んだり、人と話して自分自身のことを考えたり…という目的のない時間を持つチャンスのように思う。いろいろな場所に身を置いて、これまで当たり前だと思っていたことに疑問を持ち考えてみる。こうした「無駄に思えること」



「無駄に思えること」が積み重なって、自分を取り巻くものへのアンテナ・引っ掛かりを作り、自身の内面をより豊かにしていくのではないかとすれば、巡り巡って就職活動にも役に立ってくるかもしれない…と僥倖ながら話をまとめた。相談に来てくれた学生にとって、この話が「プラスα」になっているかはわからないが、何かのきっかけになってくれたらと思う。

この相談を受けて思ったことは、JWU ラーニング・コモンズさくらという場所は「無駄に思えること」をするのに最適なのでは、ということである。図書館の中にありながら、机を動かし、友人や先輩などと会話をしてもよいスペース。効率を重視すれば自宅で課題を進める方が早いかもしれないが、友人らと意見を出し合いながら学修し、また、たくさんの本の中から何となく一冊を手にとってみることの学びの深さは、数字では測れないものだと感じる。「無駄に思えること」の一つとして、是非、JWU ラーニング・コモンズさくらにいるラーニング・サポーターにも話しかけてもらえたら嬉しい。(人間発達学専攻博士課程後期2年・ラーニング・サポーター)

図書館からのお知らせ

図書館の動きを皆様にご理解いただき、より一層ご利用いただけるよう、2020年度の主な取り組みを下記のとおりご紹介します。今後もさらなるサービス向上に向け、取り組んでまいります。

新型コロナウイルスの感染状況は日々変化しているため、最新の情報は図書館 HP (<https://lib.jwu.ac.jp/lib/>) の「新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う図書館の対応」ページでご確認ください。

○コロナ禍における図書館

例年であれば新入生を迎えてキャンパスが活気にあふれる時期、図書館は4月に2日間開館した後、4月3日から臨時閉館となった。閉館中は、急遽遠隔での実施となった新入生オリエンテーションへの対応、春休み貸出の返却期限延長、遠隔授業開始に伴う電子ブックの大量導入、再開館時の事前申込受付方法の検討などを行った。複数の出版社やベンダーが世界的な感染症の流行拡大への対応として期間限定で利用者数や遠隔利用を拡大したこともあり、その対応と周知と共に、これまで遠隔で利用できなかった電子資料の調整なども行った。

6月には事前予約制かつ一部の施設の利用を停止した状態ではあるものの開館を再開、目白では1日平均40人弱、西生田では10人強の入館者を迎えることができた。2020年度は年度末にキャンパス統合にともなう西生田蔵書の受け入れ作業のため、2か月閉館することが決まっており、年間の開館日数は目白で192日にとどまった。

来館が難しい利用者への郵送貸出サービスも開始し、年間を通じて約240件の利用があった。

○ラーニング・コモンズさくらの活動について

前期の活動は自粛せざるを得ず、自宅学習で不安や戸惑いを覚える学生へのサポートができない状況には、サポーターからも隔靴痛痒な思いが寄せられた。後期からは対面での学修相談に加え、Teamsによるオンラインでの相談を開始した。ラーニング・サポーターと教員が昼休みの時間帯に行っていたミニ講座もオンラインにより目白で3回、西生田で1回実施した。ミニ講座には計126名の視聴があり、対面での実施よりもむしろ盛況であった。

○キャンパス統合に伴う資料の移管

2021年4月のキャンパス統合のため、西生田図書館で所蔵していた資料のうち約10万冊が目白キャンパスに移管された。これに伴い、目白の図書館の蔵書も一部配架場所を変更しているのでご注意いただきたい。西生田図書館は今後保存書庫として運用されることになり、直接来館しての利用はできなくなるが、移管されなかった資料は目白に取り寄せることができる。

○新入生学生証と図書館利用カードの一体化

教務・資格課の協力により、2021年度の入学者の学生証に図書館利用のためのバーコードを印刷することになり、図書館利用カードを持つ必要がなくなった。

編集後記 2,3月の資料移設中の閉館ではご不便をおかけした。キャンパスが統合し、4月より目白の図書館は4学部で利用する図書館として新たにスタートした。西生田保存書庫とともに学修・研究を支える存在でありたい。

2021年度編集委員：飯山智子、水嶋寿恵、南木香織

(飯山)

2020年度実施した利用者向け講習会

1年次オリエンテーション

遠隔（動画を作成し、LMSにて公開）による実施

教員からの依頼等により授業時間内に実施

<目白> 計5回33名参加

食物2回14名 被服2回12名（うち1回はZoomにて開催）英文1回7名
この他、3学科にテキストや動画を作成して提供した。

<西生田>

2学科にテキストを提供した。

図書館主催で実施

・新大学院生オリエンテーション
図書館 HP に資料を掲載